

学界展望 (文学)

小川	恒男
佐藤	大志
陳	獅
大井	さき
川島	優子
市瀬	信子
桑島	道夫
太田	亨

## ●文 学

### はじめに

2022年1月～12月の「学界展望」文学部門は広島大学所属教員及び広島大学出身者を中心とするメンバー8名が担当した。それぞれが担当した項は次の通り。

はじめに、総記、先秦・漢：	小川恒男（広島大学）
魏・晋・南北朝：	佐藤大志（広島大学）
唐・宋：	陳 獅（広島大学）、大井さき（佛教大学）
元・明・清：	川島優子（広島大学）、市瀬信子（福山平成大学）
近現代：	桑島道夫（静岡大学）
日本漢学：	太田亨（広島大学）

この1年間に刊行された単行本を中心に報告することを基本方針とするのは従来通りである。なるべく多くの情報を報告させていただきたく、各学会や大学などの研究機関、出版社や書店などのホームページからデータの抽出に努めたが、もとより網羅には程遠く見落としも多い。ご海容のほどをお願いしたい。今後、学会ホームページに開設された「会員論著目録」が機能し始めれば、もう少し確実にデータを収集できるようになるのではないかと思う。具体的な数値を調査したわけではないが、2022年は関係書籍の出版が全体的に少なかったような印象を受けた。（小川恒男）

### 一、総記

川合康三『中国の詩学』（研文出版）は作家論或いは作品論を超え、「わたしなりに中国古典詩の全体像を捉えようと試みた」、中国古典詩そのものを研究対象とする極めて刺激的な「読書ノート」である。「詩が詩たるゆえんはこうした感覚の共有にあると思う。しかしながら、『研究』の領域ではそうした感覚を味わうことはむしろ避けようとする傾向にある」という言葉に対してどのように答えればいいのか。

同書にも言及されるように中国文学の特質のひとつに「歴史がとてつもなく長いこと」が挙げられる。そのため、作品をいくら読んでも「つまみ食い」になりがちなのが、つまみ食いはいつも美味しいもので、武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編著『中国文学をつまみ食い—『詩経』から『三体』まで』（ミネルヴァ書房）は野心的な、恐らくは趣味に偏した文学史であるが、やはり美味しい。第I部「主菜<sup>メインディッシュ</sup>」にはこれまでの中国文学史ではあまり紹介されることのなかった作家や作品が意識的に選ばれ、『西遊補』が二次創作のひとつとして解説されていたり、ベストセラー作家である金庸が取り上げられたりする。第II部「小吃<sup>スナック</sup>—中国文学への多様なアプローチ」も興味深く、中国文学の多様性を再発見することができる。

王曉平『中日文学交流史』上・下（國久健太訳、グローバル科学文化出版）は労作である。第一章「漢字文化圏における内部文学の横の流れと縦の変化」が国字と訓読を取り上げて論じており、取り分け示唆に富む。書名に「交流史」とあるが、実質的には第二章から第十二章で上代の漢字受容から明治の漢学者に至るまでの日本漢学史が記述さ

れている。

車溶柱『朝鮮漢文学史』（豊福健二訳補、朋友書店）もまた労作である。「朝鮮漢文学は量的にも質的にも無視できず、日本語を母語とする文化圏の者は決して過小評価してはならないもの」だが、本著は精緻な「訳補」がその価値を大いに高めていることも見逃せない。

船山徹『仏教漢語 語義解釈—漢字で深める仏教理解』（臨川書店）は外来語など言語接触の問題を扱っていると思うが、なによりも語義を追求することの面白さと難しさが具体的な例とともに語られる。

2022年にも名著の復刊がいくつかあった。ここでは鈴木虎雄『中国戦乱詩』（講談社学術文庫）を挙げておく。（小川恒男）

## 二、先秦・漢

莊奕傑『古代中国の日常生活 24の仕事と生活でたどる1日』（小林朋則訳、原書房）は紀元17年に生きた様々な人々の日常を物語形式で描く。柿沼陽平『中国古代の24時間 秦漢時代の衣食住から性愛まで』（中公新書、2021）と合わせて読むとさらに面白い。武田泰淳『司馬遷』（中公文庫）も復刊された。「司馬遷は生き恥をさらした男である」、冒頭の一文を初めて見るという人が羨ましくてならない。（小川恒男）

## 三、魏・晋・南北朝

大上正美『嵇康の方法 文学としての「論」』（研文出版）は思想研究や歴史研究の成果を踏まえ、状況（＝いま、ここ）の中での嵇康の思惟が、いかに語られているかを読みとり、そこから浮かびあがる〈書くこと〉の意味、表現すること（＝文学）の価値を問う。そして「極私的」と標題される第八章では、歴史的敗北性・思想の限界が指摘される嵇康の作品の「文学」としての価値を問うことを通して、表現することで〈成る〉自己、そこに現出される表現者のすがたと向き合うことが、著者の「文学研究」の立脚点であることが明かされる。作者とその作品を「文学」として読むとはどういうことか、そして「文学」を研究するとはどういう営みなのかということ問う一冊。

大上氏のように研究者として作者とその作品を読み、それと向き合う、その営みの裾野を広げ、専門家以外の読者にも門戸を開くという点において、翻訳書の出版も貴重であろう。本年度は三曹、陶淵明、庾信と魏晋南北朝を代表する文人の翻訳書が出版された。

川合康三『曹操・曹丕・曹植詩文選』（岩波文庫）は、三国魏の三曹の詩文に蜀の諸葛亮の「出師の表」を併せて訳出する。「はじめに」に、『三国演義』でなじみのある三曹・諸葛亮の作品には、彼らの精神の強靱さ、心情の温かさとともに、魂の震え、心のおのきをも読みとることができるとし、甲冑の内側に秘められた彼らの生の声にも耳を傾けていただきたいとある。個々の作品の後に付された解説には、訳者がその作品から何を読みとったのかが簡潔に記されており、その彼らの声を聞き取る手助けとなる。

林田慎之助『陶淵明全詩文集』（ちくま学芸文庫）は陶淵明の全詩文を訳出する。巻

末には蕭統「陶淵明伝」が付され、「蕭統の「陶淵明伝」にふれて」「解説」では、陶淵明を隱逸詩人や田園詩人とするステレオタイプの評価に対して、残された詩文と後世の評価を手がかりとし、当時の状況における陶淵明の姿勢を読みとり、従来の評価の枠に収まりきらない陶淵明の実像とその文学が成立した所以に迫る。

吉田誠夫『庾信 四賦注釈』（日外アソシエーツ）は、庾信「哀江南賦」「枯樹賦」「小園賦」「三月三日華林園馬射賦」の四篇の賦の訳注書。冒頭には『周書』庾信伝、「滕王道序」の訓読と語注が付される。語注は清・倪璠『庾子山集注』に依拠しつつ、語句の出典をその注も含めて丹念に読みとり、更にそれを庾信がどのように用いているかを解説する。また関連する庾信の詩文も逐次引用して注も施しており、四篇の賦の注釈から庾信の文学全体へとアプローチしようとする注釈者のすがたが読みとれる。

そして、このような魏晋南北朝期の作者とその作品を、後世の文人たちはどのように読み、そこに何を求めてきたのかという問題を絵画と詩文から読み解こうとするのが、袁行霈著、佐竹保子訳の『陶淵明影像—文学史と絵画史の交叉研究』（尚斯国際出版社）である。著者は陶淵明研究の大家であり、本書は『陶淵明集箋注』（中華書局、2003）執筆の過程で収集した絵画をもとに執筆されたものという。宋以前から明末・清初に至る陶淵明とその作品及び桃花源に関する絵画と詩文をとりあげ、それぞれに対する著者の簡潔にして要を得た解説が豊富な図版とともに綴られており、図録として眺めるだけでも楽しい。付録に和陶詩に関する論稿を取め、中国文化の記号として陶淵明の受容を研究する意義と方法を示す。なお訳者による行き届いた解説が『読画塾』第13号（文人画研究会編）に掲載されているので、併せてお読みいただきたい。

高橋均『六朝論語注釈史の研究』（知泉書館）は、魏・何晏『論語集解』の撰述より以後、梁・皇侃の『論語義疏』が撰述される以前の、おおむね300年の間に作られた論語の注釈についての通史的研究。魏、晋、宋、齊、梁および生没年不明の注釈家に分けて時代順に配列し、注釈家の履歴とその論説の検討が行われており、魏晋南北朝期の学術の一端を垣間見ることができる。また資料編として各注釈書の佚文が整理・校訂されており、基礎資料としても有益である。

住谷孝之『六朝懐古文学の研究』（研文出版）は、中国古典文学における「懐古」の主題が、唐代に文学の主題として確立するに至るまでの過程、また六朝時代に成立した「六朝詩跡」と唐代に成立した典型的「詩跡」との本質的な相違について、「懐古詩」という主題の生成という観点から論じることを目的とする。主題の系譜研究や詩跡研究には既に優れた専著がその可能性を開いており、本書もそれらの研究を継承するものに位置づけられるが、「中国文学の各文体の原基形」がほぼ出揃い、「未完成の魅力」があるとされる魏晋南北朝の文学の面白さと可能性を探る研究が今後も期待される。

（佐藤大志）

#### 四、唐・宋

まず、唐・宋にまたがる書籍として東英寿編著『唐宋八大家研究』（中国書店）を取り上げる。東氏を代表とする科研費メンバーによる共著で、総論4篇、各論12篇から

なる。総論には、計量分析を通じて八大家古文全体の特徴に迫ろうとする試み（東英寿・久保山哲二「唐宋八大家古文の計量分析的考察」ほか）や、日本における八大家受容のあり方（山本嘉孝「近世日本における漢文作文と唐宋八大家」ほか）についての論考が収録される。各論では、八大家すべてを網羅するよう各1～3篇の論考を揃えており、様々な切り口から八大家への探求がなされている。

宇野直人『唐宋詩詞叢考』（研文出版）は、唐宋を中心しつつ魏から清代までの作品を広く取り上げる論考篇、短篇の論説や訳注を収録する小論篇に、書評篇を加えた三部構成である。唐代に関しては、李白、杜甫の詩や詩語についての検討がなされ、宋代に関しては、柳永の詞を扱う論考3篇のほか、林逋、司馬光、朱熹の詩についての考察も収録される。各論考で、詩語の用例の精緻な分析に基づく論証がなされており、「あとがき」に見える「作品の本文・語句を凝視して作者の意図や作品の特質を究めようとする本書のような方法も、今後ますます重視されてよいのではないか」との主張が、全書にわたって直接的、間接的に示されている。（大井さき）

次に唐代文学に関する研究書を挙げる。伊藤美重子『敦煌文書にみる民間文藝』（汲古書院）は、氏が大学定年を機に、前著の『敦煌文書にみる学校教育』（汲古書院、2018）に収録していない民間での習俗や文学、そして『説文解字』に関連した既発表の論文をまとめたものである。本書は、三部に分かれ、第一部の「民間習俗 婚礼、追儺、葬礼」は敦煌文書に見られる「下女夫詞」「児郎偉」「驅儺文」「書儀」などの民間風俗に関する資料を、第二部「民間文藝」は「伍子胥変文」「王陵変文」「醜女縁起」などの変文類作品を、第三部「切韻、説文、類書」は『切韻』、『説文』、敦煌本「雜抄」などの小学類文献を取り上げて論じたものである。

横田むつみ『唐代女性詩人研究序説—上官昭容、李冶、薛濤、魚玄機と詩作』（汲古書院）は、第一編「唐代女性詩人の詩と文学」と第二編「日本における薛濤詩の受容」とによって構成される。第一編は宮女、女道士、妓女などの代表として、上官昭容、李冶、薛濤、魚玄機という4人の女性詩人を選び、彼女らが詠じた詩に見える女性特有の表現や主張を分析し、唐代における女性詩人の文学的な意義について論述している。第二編は日本における薛濤詩の受容史に重点を置き、江戸時代後期から明治、大正、昭和にかけての日本の文人による薛濤受容の諸相を明らかにし、さらに薛濤詩が日本人に愛好された要因についても鋭い見解を提示する。

詹滿江『浣花溪の女校書 薛濤の詩を読む』（汲古書院）は、唐代の中唐期、女性詩人として天下にその名を馳せた薛濤の現存する93首の詩の全訳注である。氏の紹介によれば、「九十三首の内訳は、底本である明万曆三十七年（一六〇九）洗墨池刻本『薛濤詩』所収の八十三首が底本所録の作品—ただし八三「四友賛」は文に属するものであり、残りの十首は底本には収録しないいわゆる集外詩に類するものである」。また、その詳細は、資料篇の「底本及び薛濤詩を収録する諸本」に詳しく紹介されている。訳注は原文・訓読・平仄・押韻・校勘・現代語訳・語釈で構成され、必要に応じて「補説」を付す。唐代女性詩人研究において画期的な一冊といえよう。

西田祐子『唐帝国の統治体制と「羈縻」—『新唐書』の再検討を手掛かりに』（山

川出版社)は、2019年度に提出された博士学位申請論文を基礎とする。本書は、序章、終章を合わせて全7章で構成される。宋代に成立した『新唐書』の編纂過程に対する分析・再検討を通じて、異民族を支配する際に行われてきた統治の方法を指す「羈縻」という概念を取り上げ、唐王朝が、いかにして帰順した異民族、とくに騎馬遊牧民という軍事力をもつ勢力を支配したのかを明らかにしている。唐代の国家運営及び外交政策を知る上で欠かすことのできない新進気鋭の手になる一冊である。

前川幸雄『元白唱和詩研究』(朋友書店)は第一部が「元白唱和詩研究序説」、第二部が本書の中心となる訳注、2篇の論文が付録となっている。訳注は123組ある元白唱和詩の内30組について、解題・原文・書き下し文・押韻・通釈・語釈を記し、考察で唱和詩としての特徴を明らかにし、余説で考察の補足をする。橘英範が「前川幸雄先生の元白唱和詩の研究」という序文に「前川先生は、一九七〇年代から八〇年代前半にかけて、元白唱和詩の訳注や研究の面で孤高の業績を積み重ねていった」が、「その入手困難だった前川先生の研究が、このたび一書にまとめられ、日中の研究者にとって容易に参照できるようになったのである。両国の学会にとって、誠に喜ばしいことであるといえよう」と指摘するように、本書は今後の元白をはじめとする中唐文学ないし平安朝漢文学の研究に大いに裨益するところがあるに違いない。

横田肇『遣唐使と詩歌 その精神文化の背景を探る』(文藝春秋)は、在野の研究者渾身の一冊である。「万葉人の乾坤一擲の大勝負!青雲の志を抱いて渡海した俊英たち。その心情を詩歌にもとめ、精緻に解析。積年の研鑽の精華がここに!」という帯に書かれた紹介文のように、本書の作者は、豊富なフィールドワークを生かし、遣唐使を三期にわけてその関連する詩文を分析し、詩歌こそが日本古代の君臣の心を一つにする有力なツールであったという独自の結論を導き出す。氏の『酒詩の宴』(東京図書出版会、2005)と同様に、読む者の心に響く良書である。(陳翀)

次に、宋代文学に関する研究書を挙げる。加納留美子『蘇軾詩論—反復される経験と詩語』(研文出版)は、博士学位申請論文をもとに加筆修正したものである。本書が着目するのは、蘇軾の詩に見られる「自作参照」、すなわち自身の過去の作品を踏まえて創作するという特殊な手法である。これは、蘇軾以前にはほとんど例を見ない詠じ方だという。蘇軾の各時期の創作に対する丹念な分析と考察に基づき、詩人がそのような行為を試みた意図や動機、その試みが詩の在り方をどう変えたかといった、興味深くかつ重要な問題を論じる。さらには、蘇軾が「詩を作る」という営みに如何なる意義を見出していたのかという、文学の本質に迫る問題にも論及しており、極めて示唆に富んでいる。

平田茂樹・山口智哉・小林隆道・梅村尚樹編『宋代とは何か』(アジア遊学277、勉誠出版)は、宋という時代を、最新の研究を踏まえつつ多角的に捉え直した一書である。政治・経済・思想・文学・美術などの幅広い分野に跨がる25名の研究者が執筆に携わる。第一部「政治史・制度史・都城史・法制史」、第二部「社会史・文化史」、第三部「文学・思想史・宗教史」、第四部「国際関係史」という構成で、22篇の論考により各分野の最前線の研究が紹介される。宋という時代の全体像を把握すると同時に、宋代

に関連する研究の動向を広く概観することができる。

訳注では、『新釈漢文大系 詩人編』（明治書院）シリーズの新刊、浅見洋二『陸游』が刊行された。9000首を超える詩の中から200首を、さらに詞3首を厳選し、現代語訳・語注・詩解を付す。作品の選択にあたっては、先行する選注本との重複を避けつつ「陸游の人と文学を理解する上で重要と思われる作を総合的な判断に基づいて選んだ」とのことである。詩解には、創作の背景が説明されるほか、作品の主題や作中の表現が文学史的にもつ意義なども指摘され、合わせて読むことで作品そのもののもつおもしろさが増幅される。また、関連する作品が時代やジャンルを問わず縦横に引かれるため、陸游以外、宋代以外の作品を読む上でも重要な気づきを与えてくれる。

また、齋藤茂・田淵欣也・福田知可志・安田真穂・山口博子『『夷堅志』訳注〈丙志下〉』（汲古書院）が、〈甲志〉〈乙志〉各上・下、〈丙志上〉に続き刊行されている。  
(大井さき)

## 五、元・明・清

### 〈戯曲・小説〉

「総記」でも取り上げられた『中国文学をつまみ食い』では、「元・明・清」の作品が23と最多で、いずれも戯曲・小説の類である。また様々な視点から書かれる10篇のコラムもこの時代の戯曲・小説に関連するものとなっており、本書からはこの時代に作られた戯曲・小説群が如何に魅力的であるかを改めて思い知らされる。

ここに挙げられる元・明の作品の多くは、明末に江南で出版されているが、なぜ明末の江南なのか。そもそも明とはどのような時代であったのか。岡本隆司『明代とは何か』（名古屋大学出版社）は、これまで前後の時代における一部という扱いを受けてきた明という時代を、ひとつの意味ある時代として描き直そうとしたものである。たとえば、明末江南の経済的繁栄は宋代にまで遡るが、本書は、江南が文化的にも発展した契機を、朱元璋と覇を争った張士誠が蘇州を本拠とし、天下の文人を招いてその文運を榮えさせたところに見る。その後勝利した朱元璋明朝は社会の直接的な掌握をはかり、天子の権力による統制を通じた固定的な秩序を目指したものの、民間の社会・経済はそれとは逆の方向に動いていったという。たとえば知識エリート層である士大夫は、宋代においては科挙に合格して任官し、天子のもとで治国平天下を志す存在であったが、明代になると、血縁地縁に基づくコミュニティーで力を発揮すべく士大夫を目指す者が増え、科挙に合格しても任官しない者まで出てくる。「山人」「郷紳」と呼ばれる人々である。彼らは立身出世に興味を示さず、詩文・書画・出版など文芸に関わる活動に専念するようになる。本書は文学を論じたものではないが、明末の江南で通俗文芸が一気に花開くまでの過程を、様々な要素が絡み合う複雑な流れの中に見ることができる。

大木康「明代中国における文化の大衆化」（『世界歴史12 東アジアと東南アジアの近世15～18世紀』所収、岩波書店）は、こうした新しいタイプの知識人たちによって、旧来の士大夫文人に独占されていた高雅な文化が大衆化していったことを示す。白話小説のような文学ジャンルが成立した背景にも、下層の文化に関心を持ち、それらを積極

的に取り込もうとした彼らの存在があったという。かくして「メインカルチャーである詩文に対する、サブカルチャーの旗揚げ」が、明末の江南で起こったのである。

しかしそもそも彼らが戯曲や小説を真正面から取り上げることができたのは、こうした作品に詩文と同等の価値を与えた人、李卓吾の存在があったからである。阿部亘『李贽 明末〈異端〉の言語世界』（早稲田大学出版部）は、徹底的に言語にこだわった李卓吾の言説に、真摯に向き合った書である。第五章「詩文に託されたもの—その社会性をめぐって」からは、李卓吾が如何にして戯曲小説と向き合うようになったのか、その思考の道筋が見えてくる。本書によれば、李卓吾は「経」と「史」を論じ、「鑑戒」と「事実」をその両輪とした。「経」は「事実」という意味では「史」であり、「史」は「鑑戒」という意味では「経」たりうる。つまり「史」にもまた「鑑戒」＝「経」としての機能が期待されており、そこに「真」があれば虚構の物語であったとしても「鑑戒」として「史」と同等の権利を持ち、「経」的な言説たりうるという認識が存在していたのだという。李卓吾は戯曲や小説を論ずるにあたって執拗なほどに儒教経典を重ね合わせているが、そこには単に文芸としての物語を称揚するにあたってのアリバイというだけでなく、物語に社会的、政治的な意義を見いだす視線が確実に影を落としていると指摘する。本書も文学を論じたものではないが、明末の文学を考える上で忘れることのできない李卓吾というやや記号化した存在を、苦悩する生身の人間として見せてくれる。

その李卓吾が批評を付したとされる作品の中でもとりわけ重要なものが『水滸伝』である。小松謙『詳注全訳水滸伝』（第2巻・第3巻、汲古書院）の詳細については、第1巻が刊行された2021年の「学界展望」に譲るが、改めて強調するならば、本書は、容与堂本および金聖歎本の本文中の批評が訳出されている点において、従来の訳本とは明らかに一線を画す。当時の読者は『水滸伝』の物語を、李卓吾あるいは金聖歎にリードされつつ、彼らが何とコメントするかに期待を寄せながら読んでいたのである。

小松氏の「詳注全訳」に対し、後藤裕也・田村彩子・陳駿千・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選Ⅲ』（東方書店）は、難解な戯曲の面白さを幅広い読者に味わってもらいたいというコンセプトで作られた選訳集である（I 2016、II 2019）。本書を含め、近年次々と刊行される戯曲・小説の翻訳（新訳）については、過去の「学界展望」でもたびたび取り上げられている。「翻訳にも賞味期限があるといわれ、また研究には進展があつて、新しい研究成果を反映した翻訳も必要である」（大木康、2018 学界展望）との指摘に尽きるが、付け加えるならば、最新の研究成果を取り込みながら、なおかつ幅広い読者の獲得を意識した翻訳書が相次いで世に出されていることも近年の特徴のひとつと言える。外国文学の二次創作は翻訳を元に行われるのが一般的であり、江戸時代の翻案モノしかり、明治期以降の児童書しかり、あるいは現代のマンガやゲームしかりである。優れた翻訳書の誕生は、文学研究はもとより、他ジャンルの展開をも促しうる。そもそもサブカルチャーである中国の戯曲や小説は、現代のサブカルチャーとも相性がよい。今後の更なる広がりが期待できる。

（川島優子）



〈詩文〉

蔡毅『清代における日本漢文學の受容』（汲古書院）は、これまで中国から日本への影響という視点から論じられてきた日中漢文学交流を、日本から中国への「逆輸入」という新しい視点にたって検証を試みたものである。対象とする時代は清代であり、日本の江戸から明治にかけての時期である。日本の漢詩文の中国への伝播については、これまで近代以降を対象に論じられることはあったが、この時代を対象とした研究はほぼ行われていない。筆者はみずから資料を渉猟し、読み解くことでその時期の「逆輸入」の状況を丹念にたどってゆく。そこから見えてくるのは、伝える側である日本人の強い意志と、日本漢詩文に対する中国文人の強い関心の上に、実に多くの人々が関わることで「逆輸入」が行われたという事実である。また、頼山陽『日本外史』が中国で高く評価されたこと、黄遵憲が日本漢詩を参照し、また日本の文壇の影響のもとに「日本雜事詩」を制作した経緯などを、筆者は新資料を基に示す。これらは、日本が漢詩文を通じて、対等に中国と交流していたことを示すものである。

一方、論文としては、1人の人物に焦点を当て、その人生と作品を分析するという研究が見られた。

静永健「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釋」（『中國文學報』第95冊）は、幼くして失明した唐汝詢が書物を「耳授」した知識をもとに、『唐詩解』をものし、明末から清初にかけての江南で、唐詩注釈の「異人」として知られた経緯を明らかにする。ついで『唐詩解』の価値を、作品に付された詳細な語彙箋注と独自の評釈にあるとし、詳細に分析する。その中で、仇兆鰲『杜詩詳注』が、『唐詩解』をたたき台にしている可能性にも言及する。更に、庶民であった唐汝詢は、入手できる書物の範囲が限定されており、その分、解釈においても高尚な文学理論によるところがなく、自由な発想力を生かして解釈を行っており、これこそが明代後半期のごく普通の読書人たちの実物大の唐詩鑑賞の姿だったとする。

大木康「清初文人姜実節の生涯とその文学藝術」（『東洋文化研究所紀要』第180冊）は、明末清初の遺民姜埰の子である姜実節についての、おそらくは初めての専論である。筆者は様々な資料をつぶさに読み解き、萊陽姜氏の歴史と実節の人生を明らかにし、姜埰が遺民として伝えられた背景に、実節ら孝子たちの尽力があったことを明らかにする。更に姜実節について、その詩人、芸術家としての一面、また妓女との風流艶聞で知られる風流人の一面を明らかにしてゆくが、その過程で示される彼の幅広い人間関係によって生まれた詩文のつながりは、清初遺民の社会と文学の関係を示唆するものとなっている。本論考は、そうした姜実節の人生と文学芸術を通し、清初を生きた一文人の姿を浮かび上がらせる。なお、大木氏は「姜埰の顕彰活動－『姜貞毅先生晩章』をめぐって」（『斯文』137号）で、姜実節の父親である姜埰のために息子たちを中心に行われた各種の顕彰活動について明らかにしている。

これらの論文は、それぞれ時代を代表する著名人とはいえない特定の人物に焦点を絞り、その人物を通して一つの時代の文学の側面を描き出そうというものである。『清代における日本漢文學の受容』が、二つの国にまたがるマクロの視点で時代の文学を捉え

ようにするのだとすれば、論文方面はミクロの視点から、この時代の文学の諸相を捉えようとしたものと言える。この両方面からの探究により、元明清の詩文に対する研究は、著作や論文の数はやや少なくなはあったが、今後の研究への新しい豊かな土壌を切り開くものであったと言えるのではないだろうか。(市瀬信子)

## 六、近現代

2022年の近現代文学研究でまず目に留まったのは、文学が生成する場や文学をいかに論じるといった問題を考えさせられる王欽『魯迅を読もう—〈他者〉を求めて』（春秋社）である。あらゆる読解の使命はテキストに潜んでいる言葉の力を改めて抉り出すことにあると考える王氏は、魯迅のテキストを歴史学的な研究に合わせる従来の「解釈」を批判する。作品の外にある知識を積み重ね、テキストの周辺や文脈ばかりに目を向けていると、テキストそれ自体がコンテキストのなかへ溶け込んでしまい、文学作品は「中国近代史研究の二次文献」に墮してしまうというのである。王氏の思弁はかつてないモダニスト魯迅の相貌を浮かび上がらせるが、第2章「エクリチュールと記憶の弁証法」にその立脚点は明らかである。王氏によれば、魯迅文学の原点は若き日の破れた夢＝挫折を忘れようとする麻痺や回避にあるのではなく、自己を麻痺させても克服することがかなわず、たえず回帰してくる記憶に抵抗する手段としてのエクリチュールにある。歴史に対する読解の権利を独占しようとするイデオロギー装置や権威ある政治的言説に対して、魯迅のエクリチュールは記憶に介入するたびに過去に穴を穿ち、現在および未来へとつながる通路を作り出し、現にある生命や生活に共振可能な潜勢力を読み取ろうとするのだという。ただ、歴史・社会の文脈から自由、かつエクリチュールの一回性に立脚点を置く王氏のテキスト論的読解は、一方で「テキストの意味の決定不可能性」、ひいては『「このようにも読める』という可能な読みは根拠づけるが、自分には『こうとしか読めない』という不可疑な読みは根拠づけない』というテキスト論の陥穽（加藤典洋『テキストから遠く離れて』）に陥りやすい。「こうとしか読めない」読みの積み重ねとしてある先行研究を向こうに回してベンヤミン等に抛りつつ展開される王氏の逆説は鮮やかだが、ベンヤミンがプルーストを論じる際に使った「意志的記憶」と「非意志的記憶」の概念を、そのどちらでもない王氏自身が認める魯迅に対して援用する必要性が果たしてあるのだろうか。このテーマと視点であれば、ナラトロジーを使って精緻な読みを展開したほうが良かったかもしれない。多用される逆説は隘路に行く難しさがある。

対照的に、藤井省三「美しい目の乙女の死と Hope—魯迅における『チリコフ選集』翻訳と「酒楼にて」創作をめぐる—」（『東方学』第144輯）は、魯迅「酒楼」の阿順の眼に対する「白目も晴れた夜空のよう」という普通ではない描写や「希望の論理」の由来を、当時日本でブームだったチリコフとG・ワッツの絵画「希望」に求めている。忘れられた時代の底流（文脈）を掘り起こそうとする『魯迅—「故郷」の風景』以来の問題関心は、今一度範囲を広げて再開された。東アジアの言説空間のなかで壮大かつ深く繰り広げられる藤井「魯迅学」は、いよいよ集大成を迎えつつあるようだ。

ほかに目を引いた論文としては、河本美紀「張愛玲による映画脚本『香閨争覇戦』の発見」（『日本中国学会報』第74集）がある。香港電影資料館所蔵の映画脚本「香閨争覇戦」が1963年に張愛玲の執筆した脚本であることを同定し、同脚本の内容紹介、および意義づけを行っている。「香閨争覇戦」は香港に住む1組の夫婦が、アパートに引っ越してきた新しい隣人が原因で互いの浮気を疑い始め離婚の危機に陥るものの、最終的には誤解が解け、元のさやに取まるまでを描く喜劇である。河本氏によれば、張愛玲の「香閨争覇戦」のヒロインは引っ越し資金のためにキャリアウーマンにも転身する、つまり夫の浮気を歎くだけの受け身のヒロインではない。また、1970年代に張愛玲が執筆した、若き日の女性同士の紐帯が回想として描かれる小説「同学少年都不賤」に連なる重要な作品であるという。小説であれ脚本であれ、埋もれていた作品の発見によって張愛玲文学の変遷が間断なくとどれるようになったことは喜ばしい。

吉田富夫『中国当代文学史 一九四九—一九八九』（朋友書店）は中華人民共和国の成立から天安門事件に至るまでの時代の中国文学を政治・社会状況と関連づけながら概観した文学史だが、第V章「文学者たちの苦闘 [1958 - 65年]」等、「同時代文学」として中国文学界と伴走してきた著者ならではの臨場感がある。5節6節の「革命史小説の流行（その1）」「革命史小説の流行（その2）」や7節「農業集団化小説」では、それらの往々にして典型的な人物描写に堕した小説が、一方でまた時代の要請に応えたものであったことに思い至る。

翻訳は、閻連科『太陽が死んだ日』（泉京鹿・谷川毅訳、河出書房新社）、余華『文城—夢幻の町』（飯塚容訳、中央公論新社）、方方『柩のない埋葬』（渡辺新一訳、河出書房新社）、劉震雲『一日三秋』（水野衛子訳、早川書房）等、すでに日本の読者に馴染みの作家たちの新境地や深化を確認することができたが、ここでは馴染みのなかった作家や注目すべき新機軸に触れておきたい。金宇澄『繁花』（浦元里花訳、早川書房）は、上海の1960～70年代中頃の貧しく困難な時代と90年代の発展著しい時代が庶民の生活の視点から交互に描かれている。原作は2013年刊行後魯迅文学賞、茅盾文学賞ほか受賞したが、上海語で書かれていることも含めて中国文壇を大いに賑わせた。盛可以『子宮』（河村昌子訳、河出書房新社）は中国湖南省の農村を舞台に、清朝時代に生まれた纏足の祖母に始まり、祖母に仕えた母、5人姉妹と弟の妻、そしてその娘たちに至る4世代の女性たちの妊娠出産や生育をめぐる人生が描かれている。盛可以は「第1回華語文学メディア大賞・最も潜在力のある新人賞」を受賞した『水乳』以来、女性がライフコースの途次でぶつかる問題を身体性と絡ませながら内省的な筆致で描いてきたが、『子宮』ではより広い視野、より高い視点から女性の問題が描かれている。とりわけ、女性の身体に負担を強いる生殖コントロールの悲喜こもごもに深く考えさせられる。申賦漁『申の村の話 十五人の職人と百年の物語』（水野衛子訳、アストラハウス）は、著者やその父祖が暮らしてきた村で見聞きした話に基づく職人たちの物語である。淡々とした筆致から滲み出てくる滋味。作家としての経歴はまだ浅いが、なかなかの筆力の持ち主のようである。加藤三由紀編『黒い雪玉 日本との戦争を描く中国語圏作品集』に収められた作品は、編者があとがきで述べるように抗日戦争に甚大な被害を受けなが

ら勝利したという中国のナショナルヒストリーには必ずしも合致しない。我々はそれゆえいっそう、その小さな声に耳を澄ますべきなのではないか。

台湾文学研究ではまず、張文菁『通俗小説からみる文学史 1950年代台湾の反共と恋愛』(法政大学出版局)を取り上げたい。本書はこれまでの台湾文学・文学史研究において「反共文学の時代」として括られることの多かった1950年代の通俗小説(特に恋愛小説)に光を当て、戦後直後の台湾において中国語の通俗小説がいかに立ち上がり、60年代の隆盛につながっていったのか、(1)文化政策(2)読者(3)文壇(4)出版(作家と作品)に分けて、その道程を描き出している。とりわけ第6章3節「官能的な反共小説：女スパイの色仕掛け」の、1954年「赤黄黒」(共産主義やエログロ、犯罪の内幕・誹謗小説)を有害文芸として取り締まる「文化清潔運動」(検閲)に対して、反共の要素が入っていれば黄色と黒が多少あっても検閲をすり抜けることができ、つまりは娯楽的な要素で売上部数を狙う新聞・雑誌にとって「反共」はエログロの隠れ蓑になっていたという指摘は興味深い。また第7章では、1960年代以降恋愛小説家の代名詞となる瓊瑤に対して、大陸五四時期のロマン主義や鴛鴦胡蝶派との脈絡(「横の移植」)を指摘した李欧梵の定説を覆すべく、張氏は2節以降、1950年代の無名の作家や通俗恋愛小説の書き手として広く認知された金杏枝の作品やその文化戦略を追っている。文化清潔運動のあと、反共文壇と通俗出版の境界線が明確となり、国家の大義を語る義務から解放された通俗出版は1956年を境に急速に発展し、金杏枝と文化図書会社の販売戦略によってジャンルが確立されたという総括は興味深い。50年代の出版業や図書市場と読者の観点から「縦の継承」を明らかにしようとするもくろみは相応に達成されたように思われる。

一方で、明田川聡士『戦後台湾の文学と歴史・社会—客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀文学』(関西学院大学出版会)は、台湾文壇の主流として活躍を続ける李喬を主たる研究対象としている。李喬の代表作は多くの先行研究が政治や社会との関わりのみで台湾意識の再編成や台湾本土化の問題(反映)として論じてきたが、本書はフォークナーや安部公房といった「触媒としての外国文学」を手がかりにこれまでにない側面を浮かび上がらせる。殊に第4章「台湾文学における1960年代実存主義運動から1980年代民主化運動への展開—李喬「小説」と台湾文学における安部公房の受容」は、カミュ「シーシュポスの神話」やその延長線上にあると李喬が見なす安部公房『砂の女』の実存的問題が「小説」において台湾の読者に「主体性」の獲得や「存在の意義」を意識させるものとして投げかけられたのだと指摘している。李喬の思索や文学が生成される場に寄り添った秀逸な論考である。

注目すべき翻訳としては、王徳威・濱田麻矢ほか編『華語文学の新しい風』(白水社)が挙げられる。本書は、マレーシアをはじめとする華語(中国語)圏で華語によってものされた文学のアンソロジーである。いわゆる「台湾文学」ではないが、台湾で出版された王徳威ほか編『華夷風 華語語系文学讀本』(台北・聯経出版、2016)の簡約日本語版とのこと。編集の意図は王氏の日本語版巻頭言に明らかだが、植民地を経験した国家・地域において(旧)宗主国の言語でものされた文学は従来コロニアル/ポスト

コロニアル的観点から逃れられなかったが、本書はむしろ積極的な観点から編まれている。濱田氏が解説で指摘するように、華語文学では自明のものとされてきた「わたしたち＝漢族」という前提が揺らいでいるのである。実体は国家でありながら国家として承認されていない台湾を出自とし、移民の国アメリカに身を置いて中国語圏文学を研究してきた王氏だからこそ、また民主化された台湾の出版・言論状況があったからこそ、国家や民族から自由な小さな声に耳を澄ますことができたのだろう。後続の巻に期待大である。(桑島道夫)

## 七、日本漢学

平安朝期の漢学作品に対する解説書として、後藤昭雄『本朝文粹抄』七(勉誠出版)と柳澤良一『菅家後集の研究』(汲古書院)とが刊行された。前者は、平安期の時代思潮や美意識を知る上でも重要な『本朝文粹』より、「封事を上らしむる詔」(慶滋保胤)を始めとする11の作品を選び、それぞれの書かれた背景や、文体・文書の形式まで克明に解説し、現代語訳を付している。また、後者は、菅原道真と『菅家後集』の概要を解説した後、太宰府左遷以後のそれぞれの作品について、詳細な語釈・大意・詩形と平仄・補説を施し、極めて深く内容分析を行っている。今後、両書のおかげで、菅原道真研究・上代漢詩文研究が進展すると思われる。

研究書としては、半谷芳文『勅撰三漢詩集の研究』(研文出版)が刊行された。氏は、勅撰三漢詩集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』において、詩に政治性が内在していること、中国先行作品に対して著しい規範意識を抱いていたこと、作詩に為政者を賞賛するタイプと詩的情感のみを詠じるタイプがあったことを基盤として、「総集」「抒情」「韻律」という3つの視点から考察している。結果、勅撰三漢詩集には、「文章経国」的思想が通底し、漢詩本来の抒情と韻律を獲得したばかりでなく、日本独自の抒情の表現にまで到達した作品が現れていると結論する。

日本中世における中国文学受容についての研究書として、程国興『日本における〈呉越説話〉の展開』(汲古書院)が刊行された。氏は、『太平記』巻第四「備後三郎高德事付呉越軍事」が最初に〈呉越説話〉のまとまった形であるとする従来の指摘を発展させ、〈呉越説話〉が『太平記』に取り上げられるまでの過程、『太平記』以後の受容の様相について考察している。〈呉越説話〉が中国から移入され、時代と共にその着目点・内容が変容する実態を精査し、日本ならではの多様化を明らかにしている。

続いて近世に関する研究書に目を向けてみたい。稲田篤信『日本近世中期上方学芸史研究 漢籍の読書』(勉誠出版)では、奥田尚斎『拙古堂日纂』『拙古堂雑抄』・都賀庭鐘『過目抄』等に見える膨大な漢籍事項を抽出し、読書された漢籍の概要を把握し、さらに『世説新語補』の書き入れを精査することで、詳細な読書実態を明らかにしている。また、上田秋成に注目し、紀行文『山褰』における交遊状況や漢籍受容、漢籍を基礎とする学問、『論語』の影響について論じている。岩波新書からは、揖斐高『江戸漢詩の情景—風雅と日常』が刊行されている。第I部「風雅のありか」、第II部「文人の日常」、第III部「生老病死」、第IV部「人生のいろいろ」で構成され、江戸漢詩文に見られる当

時の人々の日常を紹介している。その内容は、漢詩ならではの語句の追究から、漢詩人の懐事情、ペットへの眼差しに至るまで、誰もが興味を引く内容となっている。

時代を通じて論じられた研究書として、「総記」でも言及されているが、王晓平『中日文学交流史』上・下（國久健太訳、グローバル科学文化出版）と高田宗平編『日本漢籍受容史—日本文化の基層』（八木書店）とが刊行されている。『中日文学交流史』上冊では、日中文学の共有形体である漢字、遣唐使集団の漢文学の播種、日本歌学の礎と漢唐詩学など、室町時代に至るまでの中日交流に関する諸相が述べられ、下冊では、日本前近代小説の勃興と中国文化との関連、明清文学と江戸文学の庶民性、19世紀における日本知識分子の漢文学教養など、江戸時代から明治時代に至るまでの中日交流に関する諸相が述べられている。『日本漢籍受容史』では、日本における出版文化を解説した後、前近代の漢籍受容の様相について、24名の論考と4名のコラムを取めている。第一部古代、第二部中世、第三部近世、第四部文献研究で構成され、それぞれの部において、漢籍に関わった人物がどのような人物であったのか、どのような漢籍を読み、どのような思想を有していたのか、特定の漢籍がどのように受容されたのか論じられており、時代毎の漢籍受容の様相・特徴を浮き彫りにしている。

日本における中国の様々な資料を考察することによって文化の特徴を見出そうとして出版されたのが、アジア遊学275『「唐物」とは何か：舶載品をめぐる文化形成と交流』（勉誠出版）である。書物や山水画を始め、文具や陶器に至るまで、「唐物」が日本に伝来し、文化装置として機能し、〈漢〉の文化として権威化したり、〈和〉の文化と融合したりする様相を紹介している。コラムを含めて26名もの執筆者が、それぞれの分野の「唐物」を取り上げ、一般読者向けに分かりやすく書いており、興味深い内容となっている。

これまで日本における中国文学の受容について論じた稿は多く見てきたが、中国における日本漢文学の受容についての論考は殆ど見たことがない。この視点から研究を進め、その成果を著したのが、「元・明・清」の項でも言及した蔡毅『清代における日本漢文学の受容』（汲古書院）である。第一部では、清客が日本人の漢詩を持ち帰っていた事象を詳細に示し、第二部では、黄遵憲・梁啓超等が来日して日本文人と交流した様相や、兪樾の編集した『東瀛詩選』が流布したことを示し、日本漢詩が逆輸入された様相を明らかにしている。さらに第三部では、日本の漢文作品、具体的には頼山陽の『日本外史』が西伝した様相を明らかにしている。（太田亨）

## ●語学

### はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。原則として2022年1月から12月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言